

---

# エンザイ

要徹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンザイ

### 【著者】

IZUMI

IZUMI

### 【作者名】

要徹

### 【あらすじ】

「俺は本当にやってないんだ！」

毎日変わらぬ日常。人波にもまれて、奴隸船に乗るかのように体を他者と密着させ、奴隸主のもとへと向かう。退屈な日常に、少しの刺激でもあればいい。男は、そんなことをいつも考えていた。男のその願いは実現する。痴漢をしたという罪に問われることで。

「この人、痴漢です！」

いつもの車内で不意に発せられた女の言葉に、男は驚きを隠せなかつた。周囲から刃のような視線が男に刺さっていく。俺はやつてない、そう言おうとするが、自分と同じ奴隸たちから浴びせられる威圧感によって何も言えない。数の暴力に近い。

女にしつかりと手を掴まれ、最寄りの駅に到着したところで男は車外へと引きずりおろされてしまった。

駅のホームに出ると、通報を受けた駅員が険しい顔をして、そして汚いものを見るかのような目をしてやってきた。ホームにいる人間も、皆が駅員と同じような顔と目をしている。

男は狼狽した。こんなことで社会的制裁を受けるのはまっぴらごめんだつた。逃げ出そうにも、女は彼の手をしつかりと握っているし、仮に手を振り払うことができたとしても、すぐに取り押さえられてしまうだろう。それに、逃げることは罪を認めることがある。

「ちょっと、駅員室まで来てもらいましょうか？」

嫌悪感をあらわにし、駅員は男に吐き捨てる。

「違う。私はその女に痴漢なんかしていない！」

「いいですから、とにかく行きましょう」

何がいいのか。男にとつては良くない。

男の抵抗も虚しく、駅員室へと、手を引かれるままに連れて行かれた。これから彼を待っているのは、何の言い訳も聞かぬ、無慈悲の裁判所だ。

駅員室に辿りつくと、女は泣きながら事情を説明する。尻を触ら

れただの、下半身を押し付けてきたの、男にとつて事実無根の話をだらだらと続ける。嘘をここまでリアルに話している女は、とてもなく恐ろしい。泣きながらも、女はかすかな笑みを浮かべているように感じられる。

涙と嘘という一重の武器によつて、男はどんどんと傷つけられ、アリ地獄の中に吸い込まれていくようだ。会間、会間に口を挟もうとするが、「後で聞きます」という言葉によつてすべて遮られた。男の息の根が止められるのも、時間の問題である。

「なるほど。彼女はこう言つていますが、どうですか?」  
やつと男が弁解する番がきた。

「本当に俺はこの女を触つていない!」

男はかぶりを振る。だが、駅員の表情はなに一つ変化しない。彼らにとつては、見苦しい言い訳をする馬鹿にしか映つていないので。「でも、彼女は触られたと言つていますよ? いい加減認めたらどうですか?」

苦笑いを浮かべ、駅員はため息をつく。さつさと面倒なことから解放されたい、そんな気持ちが彼の態度には内包されている。

こうなれば、もう何を言つても無駄だ。

黙りこくつていると、警察が駆けつけてきた。逃げられない。女は笑みを浮かべながらも、泣いているふりをしている。悪魔だ。

本当にこの女を触つていないので、なぜいわれのない罪で裁かれなければならない。

これからどうなるのか。慰謝料をふんだくられ、会社をぐびになり、すべてを失うのだろうか。そんなことを考えていると、男は震えが止まらなかつた。頭の外から追いやりつとするが、ベドロのようごびりついて離れなかつた。

肩を落としていると、男の手に冷たい手錠がかけられた。男の顔からは、生気が消えていた。

終わった。そう確信した時だ。

駅員室の扉が開き、絶望の中に一縷の希望の光が射しこんだ。

「この人は、その女人を触つてなんかいませんよ？ 私、全部知つていますから」

希望の光を射しこませたのは、天使のような女性だつた。冤罪で裁かれそうになつてゐる彼を救つ、女神が現れたのだ。それから、彼女は淡々と男の無実を証明した。うそつき女は真実を話し、警察も納得をした。男は、彼女から深い謝罪を受けた。

女神に感謝を示すべく、男は彼女に近寄つて言つた。

「本当に助かりました。危うく、いわれのない罪で裁かれてしまうところでした」男は深々とお辞儀をして、感謝の言葉を述べる。「本当にありがとうございます」

「いえいえ」

女神は神々しいまでの笑みを浮かべる。

「それでは、これで。これから仕事があるんですよ」

鞄を手に取り、足早に駅員室を去つたとする。

「ちょっと待つてください」

駅員室を後にしようとすると、今度は救いの女神に手を掴まれた。愛の告白だらうか？ 女神は目を輝かせ、そして小さく笑みを浮かべて彼女はこゝつとつた。

「この人、痴漢です」

(後書き)

満員電車の中では両手を高く上げ、  
「私は誰も触りませんよー」  
というアピールを欠かしません。  
だって、そうしないと、痴漢冤罪が怖いですからね。  
触りたいなら風俗にでも、どこにでも行きます。  
そっちの方が賢いでしょう?  
ただ、少々お金はかかりますけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8933/>

---

エンザイ

2010年10月15日21時05分発行